

森敦

わが人生の旅

下

百里を行く者



森敦

わが人生の旅

下

里を行く者

弘済出版社

わが人生の旅(下)
百里を行く者

平成二年一月一〇日 第一刷発行

平成二年三月一〇日 第二刷発行

著者 森敦

発行者 松田右近

発行所 弘済出版社

東京都豊島区北大塚一―十六―六

☎〇三(九一八)六三二一

△振替〳東京二―八三―三三―

印刷所 共同印刷

© Tomiko Mori 1990 Printed in Japan

もくじ

四面楚歌	7
おまけには目方がない	14
オイッチニャ　オイッチニャ	20
悪魔の証拠	26
ぼくはワシントン	32
百里を行く者	38
弟の作戦	44
川中島の合戦	50

謀略恐るべし……………	56
前略草々……………	62
語るに落ちる……………	68
天勝来たる……………	74
食べんうちから旨か……………	80
ぼくは元来小食で……………	86
セドリツクの服……………	92
三日にして終わる……………	98
なんの精神力の集中ぞ……………	104
ウェイト・ア・モーメント……………	110
アルキメデスの風呂……………	116
左手で字を書く法……………	122
満月が追って来る……………	128
お盆のような月……………	134
おれは地球だ……………	140
月明の道帰る声……………	146

大問題	152
加藤清正の顔	158
西瓜の種	164
加藤先生曰く	170
忠ならんと欲すれば孝ならず	176
招待選手	182
天才線	188
蛙が牛になる日	194
学ブニ如カザルナリ	200
自己暗示催眠療法	206
芝居にしても出来すぎている	212
母さん、助けてくれ	218
鼻高きが故に貴からず	224
キイクワゼンチュウブンシンカンコウ	230
砲列を敷け	236
危険な誘導	242

鬼は内、福は外……………	248
魚心あれば水心……………	254
鳥人スミス来たる……………	260
うまく行かなくても明日……………	266
弟の朝鮮語……………	272
おれの頭に神がいる……………	278
鴉の言葉……………	284
博奕なる者あらずや……………	290

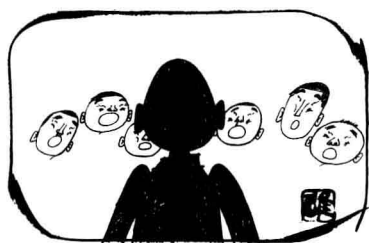
——わが人生の旅(下)

百里を行く者

装幀／エジマ企画・井之上聖子

四面楚歌

小学校の小使室でパンにバター、あるいはジャムを塗ったものを売っている。みんなもそれを買って食っているから、ぼくもそうしたい。その代わり家では昼食の用意はしてもらわなくてもいい。ぼくがそう言くと、母はなんの疑いもなくニツコリ笑い、それなら手間はぶけて、どんなに助かるか知れやしない。なぜもっと早く言ってくれないの、と言った。それでいくら上げればいいの。二十銭だ。十銭しか持っていない奴もあるが、それでは腹いっぱいにならんし、腹が空いては戦が出来ん。第一栄養不良になっちゃうからな、



弟がすかさずぼくに代わって答えた。腹が空いては戦が出来ん、とは父のよくいう言葉である。しかし、父はそれを自分に言っているのではない。伸びざかりのぼくらに向かって言っているのである。そう言う自分は非常に小食で、一膳飯は食うものではない、あれは葬式のとき死者に供えるものだ、と自他共に戒めていたが、一膳飯はしないと云っても茶碗の底にちよつと入れさせるだけである。たまたま、もう一杯食うか、と云って、三膳目を差し出すようなことがあると、母は喜んで父の茶碗を両手でおし戴いて、拝むような真似をしてみせる。母は天性そんな滑稽なところがあつて、父も笑いながら、バカが、などと言う。いまから思えば、そんなところに父と母との愛情の交換があつたのだ。栄養不良はむしろ母のよくいう言葉である。日赤の看護婦をしていたからかも知れないが、口でそう言うばかりか、外国人まで呼んで家でしばしば講習会を開いたりもした。母は弟がぼくに代わって、いや、いや、出て来たのを笑いながら、懷から財布を出して、ハイ、とぼくに二十銭くれた。すると、弟は急に文句を言つた。ぼくには。母は吹き出しながら、ハイハイ、みづる碩にはこれだけ、と云つて十銭渡した。なんだ、十銭か、と弟は叫んだ。だって、チンチャマはお兄さんでしょう。小学校でしょう。碩は弟でしょう。まだ幼稚園でしょう。それに幼稚園にもろくに行つてないじゃないの。母は笑つたが弟はへこまなかつた。そりゃ、幼稚園に行かんこと

はあるさ。そんなときにはチンチャマの小学校に行くんだ。杉山先生だって褒めてくれたんだ。母はちよつと当惑した。ほんとのことを言ったものかどうか迷ったのだらう。杉山先生は弟のことで困ったとは言わなかった。むしろ、頭のいい子だと言った。教えられるところがあつたとさえ言った。しかし、母は杉山先生が家庭訪問に見えたということ自体、それはそうでも、それとなく弟の出現には困ると言いに見えたのだということぐらい気づいていたに違いない。ぼくにしてからが弟は杉山先生が見えたことで、杉山先生と仲良しになったと思つてゐる。いよいよ図に乗つて小学校に出現して来るに違いない。そう考へて、困り果てていたのである。といつても、ぼくがチューリップで冷やかされ、ヨーシカワ、ヨーシカワ、と女の子のことで騒がれたことを早くも察知して、母からパン代をもらつて悪童の大將本倉にやれと秘策を授けてくれたのは弟である。人間なにをどう考えるか分らない。突然、

ワレナンノ面目アツテカコレニ見エン

という言葉が浮かんで来た。

虞^グヤ虞ヤナンジヲイカンセン

と絶世の美女との別れを項王が歌つた『史記』の「項羽^{こうう}本紀」に出て来るものである。父

は『史記』を好んでいた。特に「項羽本紀」を愛していた。父あたりの人、ことに漢文をたしなむ者は、ほとんど原文を暗誦していた。機嫌のいいときは、ところどころ暗誦を交えながらその話をしてくれた。蓋世がいせいの英雄項王も戦い利あらず、ついに四面楚歌しめんそかの声となった。すなわち、ことごとく沛公はいこうの包囲するところとなつたのである。項王は囲みを破つて揚子江のほとりに来たとき、ここに船がある、早く江東に渡れ、と言う者があつた。しかし、項王は笑つて答えた。おれは江東の子弟八千人と揚子江を西に渡つて来た。しかし、いま帰る者は一人もない。たとえ、江東の父兄が憐れんでおれを王にしてくれても、おれはどの面つらを下げて会うことが出来るだろう、と言つた、

ワレナンノ面目アツテカコレニ見エンマミ

である。ぼくは、チンチャマは十銭でいい、と言って、母からもらつた二十銭のうちの十銭を弟に渡そうとしたが、弟は受け取らなかつた。受け取らなかつたばかりか怒つた。ぼくはなにも二十銭がほしいから言つたのではない。差別されるのが嫌だつたんだ。母が驚いて弟に言つた。碩は差別なんて言葉を知つてゐるの。弟は昂然として答えた。知つてゐるさ、不公平のことだ。母は更に訊いた。不公平つてなんのこと？ 弟は答えた。チンチャマには二十銭やつて、ぼくには十銭しかくれないことだ。だから、ぼくはチンチャマとおなじ

霜降の制服を買ってもらったんじゃないか。靴も買ってもらったんじゃないか。頭も丸坊主にしたんじゃないか。おや、おや。そうだったの、と母は笑いだしながら、弟にも十錢つけ足して二十錢にしてやった。つまらんことにつかっちゃだめよ。パン代に上げたんだから、パンを食べないといけませんよ。家じゃもうお前たちのお昼は用意しておきませんからね。オーライ、オーライ。弟は目的を達すればそれでいいと言わんばかりに外に出て行ったが、ぼくはふと本倉にどうして十錢やったものかと考えた。本倉は馬渡に喜ん^{うまわたり}で五錢もらっていると言うんだから、ぼくからはなお喜んで十錢もらう。とはいっても、そのやり方が問題である。本倉だって、悪童の大将なのだ。それこそ面目というものもないとは言えない。下手なやり方をすれば、本倉はもらいたくてももらわないだろう。かえってますます、馬渡の忠実な味方になるかも知れない。馬渡にぼくが十錢くれようとしたが、もらわなかったと言って馬渡から十錢もらう可能性が大いにある。そのほうが板挟みにもならないし、すっきりした気持ちでいられる。しかし、弟は本倉に、お前は五錢ではない、十錢だと言ってやれば本倉は必ず喜んで受け取る、と言った。そうだとすると、馬渡はどこで十錢本倉にやっているのだろう。馬渡は校庭のアカシアの木の下で、本倉と話しているのを見たことがあった。だとすれば、アカシアの木の下でないほうがいい。もし、道で

出会ったりしたら、それに越したことはないんだが、あれこれ思い迷って翌朝学校に行き、オヤと思った。ぼくのチューリップの草履袋が、ちゃんとぼくの下駄箱のぼくの枠の中にはいつている。その代わり、大谷という女の子のところに、縞の草履袋が置いてある。大谷という女の子は吉川という女の子とどちらとも言えぬほど、可愛くもあればよくも来るのである。ぼくはやがて弟が本倉に十銭やってさせたのだと気がついた。果たしてみなが教室に集まると、だれからともなく、シーマブクロ、シーマブクロ、という声が湧き起こった。ぼくはそんなことを言うのは、恥ずべきことだと思つて黙っていた。ところが、驚くべきことに馬渡も他人事ひとごとのように、シーマブクロ、シーマブクロ、と叫んでいる。しかも、ぼくのほうを見ながらである。やがてシーマブクロの声は、オオタニ、オオタニ、オオタニに変わった。すると、馬渡も、オオタニ、オオタニ、と叫びだした。しかも、こんどはぼくのほうを見ているばかりか、笑つているのである。いまさら、ぼくはみなと一緒に、オオタニ、オオタニ、とも叫ぶわけにはいかない。まさに四面楚歌である。ぼくは自分のみならず疎外されているような、怒りともつかぬ、寂しさともつかぬものを感じないではない。それになつた。帰ると弟が昼飯を食つていた。母が笑つて言つた。頃はパンを食べずに餅を食つたから、腹が空いたつて言うのよ。弟は平然として、だつて母さんが言つたじや

ないか。餅腹は別だつて。

おまけには目方がない

シーマブクロ、シーマブクロの騒ぎもやはり弟の知るところとなった。むろん、ぼくが弟にそんなことを喋ったのではない。恥ずかしくって弟などにそんなことを喋れるもんじやない。沽券^{こけん}にかかわる。ところが、弟は本倉から聞いたのだ。もともと、本倉は悪童の大將でありながら、なんでも弟に報告しているらしい。そこへもって来て、毎月十銭やつている。そのご威光をかりて報告させているのかも知れない。馬渡^{うまわたり}がまるで他人事^{ひとごと}のようにみなとシーマブクロと喚^{わめ}いているのに、なんでチンチャマもみなとシーマブクロと喚いて

